

青いボタン

小川未明

青空文庫

しょうがつこうじぶん
 小学校時分の話であります。

まさお
 正雄の組へ、ある日のこと知らない女の子がはいってきました。

「みなさん、今日から、この方がお仲間になられましたから、仲よくしてあげてください」と、先生はいわれました。

知らない人がはいってくることは、みんなにも珍しさを感ぜさせました。正雄ばかりではありません。他国からきた人に対しては、なんとなくすこしの間ははばかりような、それでいて早く親しくなつて、話してみたいような気持ちでしたのであります。

それほど、他国の人のだれか、知らない遠い国からきた人だという、一種の憧れ心をそつたのでした。はじめの二、三日は、その女の子に対して、べつに親しくしたものもなかったが、また、悪口をいうようなものもありませんでした。

だんだん日がたつと、こんどは反対に、ひとりぼちの女の子を、みんなして、悪口をいったり、わざと仲間はずれにしたりして、おもしろがったのでした。その女の子の姓は、水野といいましたが、顔つきが、どこかきつねに似ていましたところから、だれいとなく「きつね」というあだ名にしてみました。

休みの遊ぶ時間になると、みんなは、女の子を取り巻いて、「きつね、きつね。」といつて、はやしたてました。

その女の子は、負けぎらいな、しつかりした子でしたけれど、相手が多数なので、どうすることもできませんでした。それに、知らない土地の学校にはいったことですから、小さくなって、ごこんで黙っていました。ついにたまらなくなつて、泣き出してしまいました。しかし、時間になつて、教室へはいる時分には、いつものごとく泣きやんでいましたために、先生は、ちつともそのことを知りませんでした。

ある日のこと、正雄の家へ、知らないおばさんがはいつてきました。

「私の家の娘とお坊ちゃんとは、学校で同じ組だそうでございます。それで、今日は、おねがいがあつて上がりました。娘が、毎日、学校で、きつね、きつねといわれます。それで、学校へゆくのをいやがつて困りますが、どうかお坊ちゃんにお願いして、みんながそんなことをいわないようにしていただきたいものです……。」「と、頼みました。正雄の家と水野の家とは、あまりそう遠くなかつたので、それで、彼女の母親がきたものと思われます。

学校では、正雄も、いっしょになつて悪口をいった一人なりました。なかには、ま

つたくそんな悪口などをいわずに、黙っていた生徒もありました。いま、正雄は、自分の行為に対して、気恥ずかしさを感じずにはいられなかったのです。

「それは、お気の毒のことでございます。うちの正雄に、あとからよくいきかせますから……。」と正雄のお母さんは、水野のおばさんに答えられました。

女の子の母親が帰った後で、正雄は、お母さんから、弱いものをみんなしていじめることは卑怯なことだといわれて、正雄は、真に悪かったと感じました。

あくる日から、正雄は学校へ行って、みんなが、「きつね、きつね。」といって、かかった時分に、自分はいわなかったばかりでなく、みんなに、

「弱い女の子をいじめるのは、卑怯だから、よそう。」といました。

正雄のいったことを、ほんとうだと思つて悪口をいうのをよしたものも多数ありましたが、なかには、「君は、きつねの味方になったのかい。」と行って、あざ笑つたものもあります。

しかし、いままでのように、水野に対して、「きつね。」と行って、からかうものもなくなりしました。ただ、ときどき忘れていたのを思い出したように、彼女がおとなしく遊んでいるところへ行って、「きつね。」といますと、彼女は、もう負けていずに、反

抗かたしました。そして、男おとこの子このほうほうが、しましまいには逃にげ出だしてしましまったのです。

正まさ雄おと彼かの女じよとは、だだんだんだ仲なかよよしにななつてままいりまました。正まさ雄おのおおかかげで、このこのごろは学が校こうへいいつても、みみんんななからいいじじめめられらないののを喜よろこんでいいました。そして、どどううか自じ分ぶんの家うちへ遊あそびびににききててくくれるるよよううにとといいまました。

ある日ひのこと、正まさ雄おは、彼かの女じよの家うちへ遊あそびびににゆゆききまますと、女おんなの子この母はは親おやははたいたいそそううお礼れいををいいわわれれまました。そして、正まさ雄おがよよく自じ分ぶんの子こ供どもををいいたたわわつつててくくれれたたといいつつて、お菓かし子しななどどををくくだだささいいまました。

女おんなの子このお父とうさんさんは、すすででに死しんんででななかかつつたたののです。その家うちは、彼かの女じよととお母かあさんさんとの、ささびびしいしい二ふ人たりぎぎりの生せい活かつでであありりまました。女おんなの子こは、絵え本ほんをを出だしたり、お人にんぎ形ようをを出だしして見みせせたたりりししまました。二ふ人たりは、いいつつししよよに、その絵え本ほんををひひろろげげててななががめめてていいままししたたが、その遊あそびびににも飽あきたた時じ分ぶんででした。

「あああ、私わたしこの箱はこの中なかに、大だい事じににしして持もつつていいる、青あおい石いしのボタたんががああつつてよ。亡なくなられたお父とうさんさんかららいいたただだいたたの。これこれを、ああななたたににああげげまますすわ。」といいつつて、彼かの女じよは、小ちいささなな蒔まきき絵えののししてあある香こう箱ばこののふふたたをを開あけけて、中なかから、三さん個このボタたんをを出だして、正まさ雄おの手てに渡わたしまました。

正雄は、それをしみじみと見ながら、きれいなボタンだと思いました。青い色が、いかにも美しかったです。

「お母さんに聞かなくて、しからはしはない？」と、正雄はいいますと、

「私のですから、あげてもいいの。」と、彼女は笑いながら答えました。

正雄は、それをもらって、家に帰ったのでありました。

学校へゆくと、二人は、家で遊んだようには親しく、みんながなにかいうかと思つて、できませんでした。

それは、正月のことでありました。学校が十日あまり休みがあつた、その後のことです。学校へゆくと、水野の姿が見えませんでした。どうしたのだろうか？ かぜでもひいて休んでいるのでなかるうかと正雄は、思っていました。

ある日のこと、先生は、みんなに向かつて、

「水野さんは、遠い国へ引越すつて、学校を退きましたから、空いている席を順につめてください。」といわれました。正雄は、はじめてそれと知つてびっくりしてしまつたのです。

「どこへ越していつてしまつたらう。」と、正雄は、彼女を思い出してさびしい気がし

たのであります。

正雄は、彼女からもらった、三個のボタンを取り出してながめていました。はじめは、それほどとも思わなかつたのが、だれでも、このボタンを見た人は、「まあ、きれいなボタンだこと。」といつて、ほめぬものはなかつたのでした。

そのうちに、春となりました。空の色は美しく、小鳥は鳴いて、いろいろな花が咲きました。正雄はこうした景色を見るにつけて彼女のことを思い出しました。

ちょうど彼女が、学校へ上がったときには、唇をはらして、髪をみょうな形に結っていたので、どこか、その顔つきがきつねに似ていると思つたのが、後には、そうでなかつたこと。そして、その目の色のうるんで、やさしみのあつたのが、ちようど、この春の空を見ると感じるのと似たものがあつたような気がして、正雄は、空想にふけりながら、うっとりとしたのであります。

「なんで、黙つていつたんだらうか？　そして、手紙もくれないのだらうか。遠い国つてどちらの方なんだらう……。」と、正雄は思いました。

三個のボタンだけは、まだ、彼の手に残っていました。正雄は、それを糸につないで、持つて遊んでいました。その青い色は、水の色のようにも、また空の色のようにも、とき

には、海の色のようにも、光線の具合で、それは、それは、美しく見えたのであります。このボタンを見た人は、だれでもちよつと立ち止まって、じつと目をその上に落とさないものはありませんでした。知らない人は、黙つて見返つてゆきました。知つた人は、「まあ、美しいボタンだこと、ちよつと見せてください。」といつて、掌の上に載せてながめたのであります。

しかし、だれも、この青いボタンが、石で造られたものか、貝で造られたものか、判断に苦しんだのであります。

「この青いボタンを、一つくださいな。」と、正雄は、たくさんの人からいわれました。けれど、このボタンをなくしてしまうことは、彼女に対する思い出からも、遠く離れてしまうことだと考えて、彼は、だれにもやらなかつたのであります。

「このボタンを僕にくれた、女の子の居所がわかつて、そして聞いてみなければあげられない。その女の子はお父さんからもらつて、大事にしていたのを僕にくれたのだから……。」と答えました。

みんなは、「もう、いままで、なんの便りもないのだから、その女の子の居所のわかりつこはない。」といいました。

しかし、正雄は、青々と晴れた大空を見渡して、「この、空の下どこかに、きっと女の子は、お母さんと住んでいるのだろう……。」「こう考えると、いい知れぬ悲しさと、なつかしさとが、感じられたのであります。

ある日のことでした。近所に住む、脊の高い、顔の黒い男が、

「坊ちゃん、私に、どうかこのボタンを一つください。私は、これを時計のかぎにぶらさげておきます。私は、汽車に乗って、方々を歩くのが勤務ですから、どこかで、そのお嬢さんが私の乗っている汽車にはいつておいでになり、私の胸にぶらさがっている、この青いボタンを見て、どうして私が入れたかとおたずねにならないものでもありません。私の乗っている汽車は、幾百マイルも先までゆき、その間に、数えきれないほどの停車場を通過するのですから……。」「いいいました。

正雄は、この若い汽車乗りのいうことを聞くと、なるほど、そうしたことがあるかもしれないと思いました。それで、女の子の居所がわかったら、すぐに知らせてくれるようにという約束で、この男に青いボタンを一つ分けてやりました。またある日のことでありました。正雄は、家の前で遊んでいますと、金魚売りが通りました。金魚売りは、みんなを見ると、金魚のはいっているおけを地に下ろしました。みんなは、そのまわり

に集まって、金魚をのぞいて見たのです。尾の長いや、円いや、また黒と金色の
 まだらなどの金魚が泳いでいました。

そのとき、金魚売りは、正雄の持っていた青いボタンを見つけて、目をまるくしなが
 ら、

「坊ちゃん、いい金魚をあげますから、そのボタンを一つくださらないか？」と、頼み
 ました。

正雄は、金魚売りのおじさんに、青いボタンの由来を話したのです。すると、金魚
 売りは、

「坊ちゃん、私は、こうして、諸国を流浪します。それは、どんな村でも、また小さな
 町でも、春から夏にかけて、歩いてまわります。この青いボタンを私のかぶっている笠の
 ひもに結びつけておいたら、いつか、そのお嬢さんが、金魚を買おうとなさる時分に見
 つけて、どこから、この青いボタンを手に入れたかとお聞きなさらないものでもありませ
 ん……。」といました。

正雄は考えましたが、なるほど、この金魚売りのいうことは、ありそうなことでした。
 そこで、青いボタンを一つ分けてやりました。金魚売りは金魚を、正雄がいらないと

いったのに、三びきくれました。

正雄まさおの持つもていた、青いボタンは、残り一つになりました。彼はかれこの一つのボタンだけは、けつしていつまでも放すはなまいと思おもいました。いつになったら、停車場ていしやばで、また、汽車き車しゃの中で、あの男おとこは、彼女かのじよに出であうでしょうか。そして、またあの金魚きんぎよ売りは、いつになったら、彼女かのじよの住すんでいる町まちへ着つくでしょうか。

三びきの金魚きんぎよは、まだ達者たつしやで水盤すいばんの中なかに泳およいでいます。正雄まさおは、青いボタンの一つをまくらもとに置おいて寝ねたある晩ばんに、赤い家あかのたくさん建たっている港みなとの景色けしきを夢ゆめに見みたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

初出：「赤い鳥」

1925（大正14）年1月

※表題は底本では、「青《あお》いボタン」となっています。

※初出時の表題は「青い釦」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青いボタン

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>